# アメリカ人口減少都市地域における衰退とソーシャル・エクスクルージョンの過程

## ― 住民の語りからみるイングルウッド・コミュニティ・エリアの半世紀 ―

仁　科　伸　子


### 要　約

イングルウッド地区は、20 世紀初頭には、シカゴ市南部の中心商業地域として繁栄し、1950 年代のピーク時には約 10 万人の人口が暮らしていた。しかし、1960 年代ごろから人口減少に転じ、2010 年には約 3 万 7 千人（2010　US センサス）にまで減少した。20 世紀前半には、主にポーランド系住民が暮らす地域として栄え、1950 年頃からはアフリカ系アメリカ人が暮らすようになり、サウス・シカゴの商業の中心となった。しかし、現在では空地や空き家が増加し、治安はシカゴ市の中でも最悪の地域のひとつに数えられる。

本稿は、シカゴ市で活動するコミュニティ・オーガニゼーションのひとつであるチームワーク・イングルウッドの協力により、古くからイングルウッドを知る住人たちが、イングルウッドとメインストリートであった 63 通りの歴史的経緯及び生活実態について語った記録である。

この語りから、シカゴ第 2 の商業地域がわずか半世紀足らずの間に消滅し、家族が暮らしていた豊かな住宅地が、犯罪多発地域へと変化していった様子が伝わる。イングルウッドは、典型的なホワイト・フライト地域のひとつだった。10 万人であった人口が半世紀の間に 3 万 7 千人に減少し、商業地域だった 63 通りが空き地ばかりになる。しかしながら、ホワイト・フライトそのものは、地域の衰退につながったわけではなかった。その後進められた都市再開発事業の失敗、周辺地域のジェントリフィケーションとギャングによるドラッグ取引の拡大が大きく治安に影響していった。


## 1. はじめに

イングルウッドは、20 世紀初頭から半ばごろまでは、シカゴ随一の商業地域としてデパートや映画館が立ち並ぶ賑やかな地域であった。そのころこの地域で暮らしていた住民は、アイルランド、ドイツ、オランダ、ポーランドからの移民だった。シカゴの都心部から車で約 20 分、電車ならば 15 分で到着する比較的利便性の高い地域であるにもかかわらず、2014 年 8 月、地域の再生事業を行うた

めに組織化されたチームワーク・イングルウッドのオフィスの窓から見える地域一帯は、荒廃し、荒地が広がっている。

イングルウッドの人口は、1950 年代には約 10 万人でピークに達し、その後減少に転じた。1960 年代には、地域住民の約 30％が白人になり、1990 年ごろには、99％の住民がアフリカ系アメリカ人に転じ、現在では、アフリカ系アメリカ人が人口の約 97％を占めている。

2010 年の世帯数は、約 11,750 世帯であるが、このうち住宅を所有している持ち家世帯は、約 4,300 世帯（36.5％）である。地域の平均世帯収入は、250 万円程度となっており、貧困線以下の世帯は、全世帯の約 49.8％である（US センサス　2010）。この地域は、シカゴ市の中でも、貧しい地域に位置すると考えられる。

シカゴの歴史を紐解いてみると、人種の偏在には 2 つのプロセスがみられる。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての主要産業のひとつであった食肉産業の雇用構造が地域の人種間の隔離を拡大した。当時、シカゴのダウンタウンの南側に立地した食肉工場では、東欧からの移民が多く働いていたが、20 世紀に入ると、待遇の改善などを求めて頻繁にストライキが起こるようになった。ストライキが起こると経営者は、南部からアフリカ系アメリカ人を鉄道で運び込みスト破りの労働者とした。おりしも、1910 年代は、害虫の被害により南部の農業が大きな被害を受けていたため南部の労働者は職を探していた。彼らは、組合やストライキの意味さえ分からないまま食肉工場で働いた。そして工場の近隣に彼らの住む町、ゲットーが形成されていったのである（竹中　1995）。工場労働者は、ほとんどが移民か南部から運ばれてきたアフリカ系アメリカ人であり、彼らは文化を共有する者同士で次第に同じ地域に居住するようになり食肉工場のある地域を中心に移民たちの町が形成されていった。このようにしてシカゴの各地域にアフリカ系アメリカ人の居住地域が形成されていった。しかしながら、イングルウッドは、このようにして形成されたゲットーではない。

2 つめは、郊外開発の進展とその差別的販売戦略による。竹中の指摘によると 1950 年代以降、シカゴで勢いのあった不動産業者の何社かが人種間の感情や心理を利用して、よりよい環境を求める白人たちに郊外居住を勧めた（竹中　1995）。その上、当時郊外開発が進んだことや、マイノリティの中の中産階級がより環境のよい地域を求めて移動することを望んでいたため、白人地域に不動産を紹介するいくつかの業者が現れた（竹中　1995）。業者は、白人にはマイノリティの地域への流入を理由に住宅を安く買いたたいて、郊外に新しく開発された地域を高く販売した（竹中　1995）。そして、これを経済的に余裕のあるマイノリティグループに対して、高く転売したのである（竹中　1995）。このようにインナーシティから白人たちが郊外の環境の良好な地区を求めて移転する現象は、ホワイト・フライトと呼ばれている。イングルウッドも典型的なホワイト・フライト地域のひとつだった。この現象は 1950 年代から始まり、ヨーロッパからの移民を中心としていたイングルウッドは、1970 年代にはすっかりアフリカ系アメリカ人の住宅地へと変わった。

## 2. 研究の目的と方法

イングルウッドでは、1950 年代に 10 万人であった人口が半世紀の間に 3 万 7 千人に減少し、商業地域だった 63 通りが空き地ばかりになる。しかしながら、ホワイト・フライトそのものは、直接的に衰退につながったわけではなかった。イングルウッドでは人種の入れ替わりは生じたが、1970 年代後半ごろまでは、都市の賑わいや多様な職業や階層の人々の関係性を保った状態であった。この論文の中で明らかにするソーシャル・エクスクルージョンとは、地域の住民が仕事や教育や物品の購入や健康な生活から阻害されている状態である。イングルウッドに暮らす住民の多くは仕事についておらず、移動の手段としての車を持たず、買い物をするための食料品店も地域無く、子どもたちは、家庭内で日常的に収入を得る仕事をしている人を見ない暮らしをしている。

本研究の目的は、イングルウッドにおける商業地域衰退の状況と住民や地域で働いていた人々の語りをもとに、いつ、どのようにソーシャル・エクスクルージョンが始まっていったのかを明らかにすることによって、地域衰退の真の要因を探ることにある。研究方法は、ナラティブアプローチの手法を使って、対象者 11 人にインタビュー調査を実施ししている（表 1）。

表 1　住民インタビューの対象とインタビュー日

| 年月日 | 氏名 | 所属など |
|---|---|---|
| 2014. 8. 10 | A<br>50 代後半、男性 | Englewood 出身者，現在イングルウッドで就業 |
| 2014. 8. 11 | B<br>50 代後半、男性 | 〃 |
| 2014. 8. 11 | C<br>60 代、男性 | 住民、元ギャング組織メンバー（本人言）<br>現在は無職 |
| 2014. 8. 12 | E<br>50 代後半、男性 | 住民、コミュニティ・ディベロッパー |
| 2014. 8. 13 | F<br>60 代、女性 | 住民、公営住宅から転入 |
| 2014. 8. 15 | G<br>50 代前半 | 元住民、現在ミュージシャンの夫と郊外に居住、イングルウッド、アーバングレシャムエリアで子どもの支援を行う活動実施中 |
| 2014. 8. 16 | H<br>60 代、男性 | イングルウッド住人 |
| 2014. 8. 16 | I<br>60 代、女性 | 〃<br>ＧＥＤＣの出資者の一人 |
| 2014. 8. 17 | J<br>60 代、男性 | 〃<br>イングルウッドにおいてコミュニティ・ディベロップメントに携わった経験があり |
| 2014. 8. 20 | K<br>60 代、男性 | 元イングルウッド居住者、現在医師として働き、ダウンタウンに居住 |

設問内容は、以下の 2 点のみとして、語られたストーリーを逐語化して、これを分析して本研究の目的に関連する部分と年代別に分類し、本稿を書き起こすために日本語訳を行った。住民の証言を年代別に整理し、地域衰退の実態と要因を抽出した。

研究倫理に関しては、研究の目的及び日本語による論文及び研究発表に関する同意と、インタビューに答えたくない場合はいつでも拒否できる旨を明示した。また、本稿においては、氏名を公表せず、アルファベット表記とし、個人が特定される情報は除いている。また、本研究の目的に関連しない個人情報が含まれる部分は、本稿には使用していない。

## 3. 研究結果

### 3.1　1960～70 年代

#### 3.1.1　E 氏の話

E 氏はイングルウッド地域に立地する大きな邸宅で生まれた。この邸宅は、1950 年代に父が購入したものだ。この時期にイングルウッドに土地や住宅を購入できたのは相当に裕福なアフリカ系アメリカ人であった。

*私は、大学に行って一旦イングルウッドを離れたが、務めていた大手コンピューターメーカーを早期退職し、イングルウッド地域の再開発を志し、子どもや妻とともに地域に戻ってきた。目標は、父の時代の街並みや暮らしを再生するということである。ヒアリングを実施した 2014 年には、CDC を立ち上げて、活動を開始したばかりである。E 氏の活動の目的は、シカゴ市の中でも最も犯罪の多い地域であるイングルウッドをかつての賑わいと気品のあった地域に取り戻したいと願っている。*

*父がイングルウッドにやってきたのは、1958 年だ。両親が結婚し、イングルウッドにすばらしい邸宅を購入した。父は、自分のビジネスを持っており、裕福だった。*

*19 世紀に建てられた E 氏の自宅は、ポーチと塔が特徴的なビクトリア朝風の建物で Yale 通りに立地している。イングルウッドにおいてかつては Harvard 通りと Yale 通りには、豪華な住宅が立ち並び、どちらの町並みがすばらしいかを競っていた。私の家がある Yale 通りに並んで走る Harvard 通りは美しい邸宅が並ぶ通りとして競い合っていた歴史がある。19 世紀には当時の新聞に "Yale or Harvard" と題する記事が掲載されたほどである。*

*住宅の内部は、当時のディテールを残しており、貴重な建物である。メイプルウッドの階段や室内のパネル等、当家は多くのオリジナルなしつらえを残しており、建設同時ヨーロッパから運んできたといわれる暖炉も美しい形状をとどめている。*

*私は、この家に幼い息子と妻とともに戻ってきて以来、家の周囲にフェンスをめぐらせた。そうしなければ危険な地域でもある。しかし、このフェンスをめぐらせるときには、もともとのオリジナルなデザインや住宅の年代等にあっているかどうか、デザインに気を使っている。門扉は、オリジナルな門扉と同様なものを見つけて使用した。*

*私が生まれたのは、1960 年代前半で、私の記憶の中では 63 通りがにぎわっており、シアーズのデパートを中心に通りに様々な店が並んでいた。アフリカ系アメリカ人が掛売りで品物を買える唯一の店だったシアーズにお使いに行ったことを記憶している。私の記憶では、その当時は、シカゴ南部地域に暮らす人々は皆 63 通りに買い物に来ていたものだ。鉄道が走り、通りには路面電車が通り、行き交う人々で混雑していた。*

*1980 年代になるとエバグリーンプラザ等、他のショッピングモールへと客足が流れた。エバグリーンプラザは、アメリカ初の車でのアクセスを想定した本格的ショッピングモールのさきがけであり、1952 年から開業していた。80 年代には、生活のレベルが上がり誰もが車を持つようになり、かつ、公民権運動によって平等と権利を勝ち取ったアフリカ系アメリカ人たちがどこにでも買い物に行くようになったのだ。子どもの頃に、近所に白人地域があって、その道路より西側へは行かないように親から言われていたことを覚えている。*

*1970 年代半ばから 1990 年代にかけて、イングルウッドはギャングの活動が活発になり、このことが治安を悪くしていった。1970 年代後半から次第に大型店舗は撤退し、いわゆる近所のおじさんおばさんがやっているような小さな店はなくなり、90 年代にはすっかり韓国人やインド人が店舗を構える通りに変わっていった。*

### 3.1.2　K 氏の話

K 氏は、1955 年生まれのアフリカ系アメリカ人の医師である。彼の記憶に残る最初の住居は、両親と兄とともに暮らしたワシントンパークにある 2 ベッドルームのアパートだった。しかし、両親の離婚により、イングルウッドに移った。

写真 1　上　ビクトリア朝の邸宅
写真 2　右　この住宅が建てられたときヨーロッパから輸入された暖炉とマントルピース

E 氏の邸宅
撮影　筆者

父は、海軍の兵士で、真珠湾攻撃で生き残った。除隊してからは、新聞の印字を組む技術者として働き家族を養った。幼い頃、父が車を運転して兄と自分が後ろに乗っていたことや、父と母がレコードをかけてダンスをしていたことを覚えている。二人は、ダンスをきっかけに知り合い、音楽やダンスが好きだった。

下に妹が生まれたが、幼くして病気で亡くなった。このことをきっかけに両親は離婚し、母と兄と3人の暮らしが始まった。1964年には、母が再婚して継父の家に引っ越した。そこがイングルウッドだった。4年生のときのことである。

私の記憶に残るイングルウッドの63通りはにぎやかだった。今のイングルウッドの63通りとは全く違う。よく行った店では、Schulzeというパン屋を覚えている。駅の近くには、ハックフィンというドーナツ屋があった。ハックフィンは、ガラス張りになっており、大きな鍋にたっぷりと油が入っていて、ドーナツをつくるところが見えた。子どもたちは、腹をすかせてドーナツができるところを外から眺めた。少し成長した少年たちは、飲み物を頼んで店の中にいた。そこは、女の子が通るのを眺めたり、友達が来るのを待ったり、仲間と過ごす場所だった。

63通りとホステッド通りの角にデパートのシアーズがあったのを覚えている。当時アフリカ系アメリカ人の女性がクレジットカードを持っていることは稀だった。しかし、母はクレジットカードを持って買い物をしていた。

イングルウッドには、進学校として知られているアーバンプレップスクール（大学への進学を目指したレベルの高い学校）のイングルウッド校があり、遠くから通う人もいた。また、コミュニティカレッジ、キングスカレッジもあり、教育環境もよかったといえる。キングスカレッジは公立の短大として大学への登竜門ともなっていた。

しかし、自分は母親の意向で私立の学校に行った。そのことはとてもよかったと思う。1970年代初頭には、イングルウッドは、アフリカ系アメリカ人が中心の地域になっていたが、のちにイングルウッドがここまで荒れ果てるとは、そのころはだれも想像していなかった。

サウスサイド・メソニック・テンプルは、1960年代には、シカゴ市の所有になっていた。しかしその後、放置されて廃墟になっている。役所すら、イングルウッドを出て行ったことで、ますますサウスサイドには仕事がなくなって、失業者が増えた。1967年にはシカゴ市営のレッドラインが南に延長され便利になった。

1950年代後半からインテグレーションが始まり、白人地域にアフリカ系アメリカ人が移住するようになったが、それより以前に移り住んだのは、裕福な人々だった。不動産業者は、アフリカ系アメリカ人が入ってくると地価が下がると扇動し、白人たちは、急いで郊外の住宅地へと転出していった。そして、アフリカ系アメリカ人たちには、治安のよい、教育環境のよい地域に移るには金がかかると宣伝し、高い金額で白人地域の家を買わせた。そして、徐々に人種の入れ替わりが生じていった。しかし、70年代にはまだ、大通りにデパート等の商業施設、オフィス、店舗があり、薬局や飲食店や商店が並んでいて、いろいろな階層の人々が働く場所があった。

1973年、高校を卒業する年に、母のつれあい、つまり義理の父が亡くなり、イングルウッドから引っ越した。このため、本当にイングルウッドが今に至った状況を見ることはなかった。

### 3.1.3　F 氏の話

F 氏は、もともと公営住宅に住んでいたが、それが取り壊しになって 1990 年代にイングルウッドに移り住んできた。1990 年代からシカゴ市は、治安が悪化した公営住宅を一掃し、ミクストディベロップメントを進めてきた。公営住宅に暮らしていた人々は、支払い可能な安い家賃の賃貸住宅を求めて、サウスサイドにやってきたといわれている。イングルウッドは、賃貸住宅が多く治安が悪いため家賃が安い。F 氏は、勤労者階級の主婦で 63 通りにあったチェーンのドラッグストアで働いていた。

*私の記憶に残る 63 通りは、今のループやダウンタウンのように誰もがきちんとした服装で、買い物やシカゴシティバンク（銀行、今の US バンク）に用を足すために出かけるところだった。銀行には、貸金庫があってこれを利用していた。60 年代末から 70 年代の 63 通りには、ウォールグリーン、今は K マートと呼ばれる Kresge、ヒルマンズ（Hillmans）、シアーズなどがあった。カーズ（CARR's）映画館にも同様にデパートがあった。*

*1960 年代ごろ、両親が子どもを置いて夜出かけるときには、二人は 63 通りに来ていた。お土産にホワイトキャッスルのハンバーガーを買ってきてくれるのがとても楽しみだった。子どもは早く寝るように言われて、布団に入っているのだが、ホワイトキャッスルのハンバーガーの匂いが漂ってくるともう我慢できずに起きだして、それをもらうのがとても楽しみだった。*

*70 年代には、63 通りには、仕立て屋やお針子、歯科医などプロフェッショナルな人たちもたくさん住んでいた。ハックフィンドーナツが駅のそばにあり、大きな窓からドーナツがあがるのを眺めることができた。CTA の駅のすぐそばだったので、電車を下りるとハックフィンのドーナツのにおいがしたものだった。*

*私は、この通りにある薬局で働いているときに、いつも乗るバスのドライバーと恋に落ちて結婚した。1974 年のことだった。結婚指輪は、63 通りのノーマンズ宝石店で買った。そして、子どもが生まれて二人で育てて、あっという間に時が過ぎていった。この通りには、思い出がたくさん詰まっている。夫が 61 歳で病死するまでずっとウェントワース（Wentworth Gardens）の公営住宅に暮らした。夫は、バスのドライバーとしてこの通りを毎日通り、私は子どもを育て、バスで 63 通りに仕事に通った。*

*公営住宅が建替えられることになって、イングルウッドに移ってきた。よく、公営住宅から来た人は庭がなかったから住宅の管理ができないといわれたりするが、自分はバルコニーでも花を育てていたし、今も芝生の手入れや草木の手入れはきちんとしている。*

*1980 年代、63 通りが歩行者天国になった。そして、車が通れなくなってしまった。駐車場は遠く、買い物をして歩いていくのが大変だったし、前のようにバスにも乗れなくなってしまった。そして、この歩行者天国にギャングたちが歩き回るようになって、すっかり治安が悪くなってしまった。63 通りがすさんできたのは 80 年代だと思う。*

*母がなくなった日にもこの通りを歩いていた。母が亡くなった悲しい思いを抱えて、この通りを足早に歩いたことを覚えている。店はいつもどおり開き、人々はいつもどおり買い物をし、笑っている*

*のに、母はもうこの世にいないのだと、泣きながら通りを歩いた。あんな悲しい、辛い思い出は、ただ一度だけだ。63 通りは私の人生の中の様々な思い出と重なっている。*

### 3.1.4　I 氏の話

I 氏は、60 代女性で、グレーター・イングルウッド・ディベロップメント・コーポレーション (GEDC) の出資者の一人である。

*私は、この地域に愛着がある。私の祖父がこの土地に初めて家を買った。彼は退役軍人で、起業家だった。そして、祖父母の家は、私にとって、安心して過ごせる場所だった。1970 年代、私は彼らとイングルウッドに暮らすようになった。63 通りはお小遣いをもらうとすぐに買い物に出かける通りだった。子どもの頃には、親も自分も危ない等と思ったことはなかった。63 通りに行けば何でも手に入ったから、ダウンタウンに行く必要はなかった。私の祖母が昔話してくれた思い出では、映画館の池に白鳥が泳いでいたということだ。63 通りは、昔はちょっとしゃれた通りだった。祖父は自営業で、チープ・チャーリーという日用品と食料品を売る店を営業していた。その店は 69 通りとアミテージの角にあった。*

*2009 年、コミュニティ・オーガナイジングに参加した。すると、地域の多くの人々が参加するようになった。私は、イングルウッドの中に 3 つの住宅を保有している。私は、コミュニティの中に価値を見出している。*

*私が初めてイングルウッドに住宅を購入したとき、ギャングのテリトリーには気をつけた。私は、このコミュニティが好きだし、このコミュニティの歴史が好きだ。しかし、地域には投資が少なすぎる。私は自分のブロック内に賃貸住宅を購入した。そうすれば、自分が地域をコントロールすることができるからだ。他の誰かが買わないように、自分たちで買い取っていくほうが地域の管理がしやすい。テナントは大家がコントロールすることができる。だれがどのように住むかをコントロールして、自分の住んでいる地域を安全で住み心地のよいものにしていくためには、土地を所有することが重要だ。*

*現在のイングルウッドの持ち家層は 30％に過ぎない。20 年前はもっと多かった。多くの持ち家所有者は、ここを離れて遠くへ行ってしまった。ここの土地を買う人はほとんどが地域外に暮らしている。しかし、私にとっては、ここが唯一の私の家である。*

*通りでの盗難や犯罪の話を耳にするようになったが、自分自身は一度も経験はない。コミュニティの中に犯罪や暴力はあるが、私の周りではそのような事件は起こったことがない。*

*私は、退職してボランティアをするようになってイングルウッドの住民の中でちょっとした顔ききになっている。昔はコミュニティの中のつながりはもっと強かったと感じる。現在イングルウッドの住民の多くは、最近になってイングルウッドに来た人たちである。昔は、コミュニティの中では人々はお互いのことをよく知っていた。イングルウッドでは、地元の店を大切にしなければならない。ローカルビジネスがあれば、地元の人が働ける。私は、イングルウッドは、荒廃しているとは考えていない。ただ投資が足りないだけである。*

### 3.1.5　G 氏の話

G 氏は、祖父母の代からイングルウッドの住民である。若い頃は、ロサンジェルスでモデル業をしていたこともあるが、現在は、イングルウッドやアーバングレシャムで子どもを支援する活動をしている。G 氏は、虐待されたり、悲しい目にあったりする子どもたちに癒しや、活動の場を与えて、子どもたちが自尊心を育てられるように支援する活動をしている。

*私が、イングルウッドに暮らしていたのは、60～70 年代のことだった。7 人兄弟姉妹の大家族とともに、子どもたちは電車の軌道でよく遊んでいた。きょうだいはかくれんぼをして遊んだ。63 通りはショッピングのための通りだった。まるで今のダウンタウンのような感覚で出かけたものだった。子どもたちの間では遊び半分に万引きをするものがいたことを覚えている。子どもの頃は、よく 63 通りで遊んでいた。私自身も兄や姉たちと一緒にお菓子屋さんに行って、悪いと知らずにお菓子を握って出てきてしまったことを覚えている。*

*祖父母が若かった頃には、食べるに困った人がいればうちにやってきて一緒にご飯を食べたり、困りごとを抱えた人の相談にのったりして家の中には常に誰か来客があった。祖父母は、商売人で裕福だったので、いつも家に人が溢れていた。イングルウッドは、村のようなコミュニティのある場所だった。誰もが顔を知っていて子どももたくさんいた。*

*現在は、郊外の住宅地に夫と暮らしている。2001 年に母が亡くなり、ついですぐに父も亡くなった。それで、イングルウッドに来ることも少なくなった。*

*しかし、イングルウッドを出て行った人に対して、今も地域に残っている人たちは複雑な思いを持っていると思う。治安のいい地域に出て行けるほど裕福になったことに対するやっかみもある。また、もし、必要としていても、コミュニティの外へ出て行った人の援助は受けたくないという人もいる。昨年は、子どもを支援する活動上の些細なトラブルのすぐ後に、自分の車が放火されるという事件を経験した。夫からは、もうそんな危険な地域に行くことはやめたらどうかと言われるが、自分は、自分が育った地域で、苦しんでいる子どもたちがいる以上活動を続けていきたい。*

*私は、子育てをするには、住民皆が子どもを見守っているような“村”が必要だと考えている。私が、子どもの頃には、“キャッチ・ア・ガール・キス・ア・ガール”という遊びをしたり、かくれんぼをしたり外で遊んだものだったが、今の子どもたちはダブルダッチの跳び方も知らないし、ロープのまわし方もわからない。子どもたちを外で遊ばせるような状況ではないからだ。現在、シカゴ市は、イングルウッドの住民やステイクホルダーに対して、1 ドルで空き地を販売している。これを購入して子どもの遊び場を作ろうと考えているところだ。安全に遊べる場所を作るために、祖父母の家の隣の敷地を購入した。*

## 3.2　1970～80 年代

### 3.2.1　J 氏の話

J 氏は、1963 年にイースト・イングルウッドで生まれた。現在、アーバングレシャムのサマープ

ロジェクトで働いている。J 氏は、イングルウッドで生まれ、イングルウッドで育ち、そして、今の職業に就くまでは、イングルウッド・ビジネスマンズ・アソシエーションで働いていた。この組織は、63 通りの商店主会である。

*70 年代にはよくホステッドと 63 通りに行った。そこにはシアーズや Wieboldt's といったデパートや、座って食事のできるカフェやレストランがあった。ソフト・タウン・シアター (Soft Town Theater) にも行ったことを覚えている。建物のなかには商業施設があり、ダラーショップが入っていた。映画館の中ではねずみがおり、映画を見ていると、足の上をねずみが走り抜けていった。*

*1970 年代から、1981 年にかけて、商業施設のアシスタント、そして後には、管理者補助として働いた。1985〜1993 年には、イングルウッド・ビジネスマンズ・アソシエイション、その後は、グレーター・イングルウッド・ローカル・ディベロップメント・コーポレーションで働いた。*

*1970 年代に実施された I11、R-47 都市整備における歩行者専用のクル・ド・サックのつくりは、安全上の問題を孕んでいた。ショッピングモールの裏側に駐車するために、車が人目につかないところに置かれることになったからだ。遠くまで歩くつくりは本当に不便だった。たとえば、モールでソフトクリームを買って、車に戻ろうとすると、長い距離を歩いている間に、溶けてしまうのだった。*

*ショッピング街の建替えに当たって、韓国系の商店主が排除された。地域の活性化のためには、すべての商店主が整備後に復帰することが必要だったが、人種的排除の問題が生じた。ちょうどそのころシカゴでは、ブラックパンサー党のイリノイ州の代表であったフレッド・ハンプトン (没 1969 年) が警察によって射殺されたことを回顧する大きな暴動が起こった。しかし、この頃は、コリアン・マーチャント・アソシエーションとイングルウッド・ビジネスマンズ・アソシエーションは一緒に働いていた。J 氏がモールのディレクター補佐だった頃である (1970 年代後半と思われる＊注意書き筆者)。開発後、モールの店舗の賃料が高騰し、小さな店舗を経営していたアフリカ系アメリカ人店主たちには到底支払えないような金額になった。*

*初めてのアフリカ系アメリカ人ヘラルド・ワシントン市長が急死した後、ユージン・ソイヤー市長 (1987〜89 年) は、何とかイングルウッド商店街を復活させようと 300 万ドルを都市再生につぎ込んだ。このときには、地域で都市再整備のための寄付も募られた。*

*道路が歩行者専用になり、パーキングが遠く離れたところになり、これによって売り上げが大幅にダウンしたシアーズが 1986 年に閉鎖したことが、イングルウッドの衰退の象徴だった。そして、コミュニティにおけるアフリカ系アメリカ人の雇用が促進された。しかし、イングルウッドは、貧しい労働者階級のまちとなり、健康問題や環境問題が深刻だった。63〜55 通りにかけての地域が、人種転換問題に影響された。*

J 氏は、イングルウッドが大好きだという。いつか、ここに家を買いたいと考えている。しかし、仕事がなければ人々はほかの職場のある地域に移動してしまう。学校もまた重要である。63 通りにはチャータースクールを設置する動きが見える。

### 3.2.3　C 氏の話　～ギャングについて～

C 氏は、自分は当時ギャングだったと話した。

*私は、ブロンズビルという公営住宅から 1980 年代にイングルウッドにやってきた。ブロンズビルは、シカゴ公営住宅なのかでも最も治安が悪い住宅団地だった。現在はイングルウッドで借家を借りて暮らしている。公営住宅が取り壊しになるというので、家賃の安いイングルウッドに引っ越した。*

*70 年代には、母親についてイングルウッドでショッピングをしたことを覚えている。子どものころはコミュニティセンターや公園で遊ぶのが好きだった。63 通りでは、ドーナツが 5 セントで売られていた。いつも湯気が立っていて、熱くてうまかった。少し大きくなると、64 通りと Lowe 通り交差点の角にあったスケートリンクでスケートをして遊んでいた。70 年代には人々が外から買い物に来るおしゃれな場所だった。自分は、ピーナッツやキャンディを売って小遣い稼ぎをした。*

*80 年代になるとギャングになった。当時シカゴで活動していたのはブラック・ディシプル・ネイション (Black Disciple Nation) といわれるギャンググループで、ギャングになるには、関門があり、自分がいかに組織にとって役立つ人間か、いかに賢いかを証明する必要があった。*

*ギャングに入れると誇らしい気持ちになった。また、一旦ギャングになってしまえば、常にグループで行動し、助け合わなければならなかった。他方、町の困っている人を助けたり、けんかを仲裁したりもした。BDN のチームカラーは、ブルーだった。ブルーのスカーフを巻いて、揃いの T シャツを着て 63 通りを歩いた。資金を集めて、商売を始めるという目的をグループは持っていた。もちろん親たちは息子たちがギャングに加わらないよう厳しくいう人が多かった。ギャングは普通に仕事をするよりもずっと効率的に金を稼げた。ギャングがもう少し、頭がよくて経済開発を頭においていれば成功したに違いない。*

## 4. 研究結果の分析

### (1) イングルウッド荒廃の時期と要因

イングルウッドの人口は、1970 年に白人とアフリカ系アメリカ人との割合が完全に入れ替わり、住民の 98％がアフリカ系となる (表 2)。しかし、70 年代初頭の段階では、人種の入れ替わりそのものは、人々に荒廃や衰退を感じさせるほどのものではなかった。

住民のストーリーの中から 70 年代の 63 通りとイングルウッドに関するものを見てみると、次のようなものが見られる。

*70 年代には、63 通りには、仕立て屋やお針子、歯科医などプロフェッショナルな人たちもたくさん住んでいた。ハックフィンドーナツが駅のそばにあり、大きな窓からドーナツがあがるのを眺めることができた。CTA の駅のすぐそばだったので、電車を下りるとハックフィンのドーナツのにおいがしたものだった。(F 氏)*

表 2　イングルウッドの人口とアフリカ系アメリカ人の割合

| 年　代 | 人　口 | アフリカ系アメリカ人割合 |
|---|---|---|
| 1930 | 89063 | 1.3% |
| 1960 | 97595 | 68.9% |
| 1970 | 89595 | 96.0% |
| 1980 | 51583 | 99.0% |
| 1990 | 48434 | 99.0% |
| 2000 | 40222 | 98.0% |

資料：USCensus

*私は、この通りにある薬局で働いているときに、いつも乗るバスのドライバーと恋に落ちて結婚した。1974 年のことだった。結婚指輪は、63 通りのノーマンズ宝石店で買った。そして、子どもが生まれて二人で育てて、あっという間に時が過ぎていった。この通りには、思い出がたくさん詰まっている。夫が 61 歳で病死するまでずっとウェントワース（Wentworth Gardens）の公営住宅に暮らした。夫は、バスのドライバーとしてこの通りを毎日通り、私は子どもを育て、バスで 63 通りに通った。（F 氏）*

*7 人兄弟姉妹の大家族とともに、子どもたちは電車の軌道でよく遊んでいた。きょうだいはかくれんぼをして遊んでいた。63 通りはショッピングのための通りだった。まるで今のダウンタウンのような感覚で出かけたものだった。子どもたちの間では遊び半分に万引きをするものがいたことを覚えている。子どもの頃は、よく 63 通りで遊んでいた。兄や姉たちと一緒にお菓子屋さんに行って、悪いと知らずにお菓子を握って出てきてしまったことを覚えている。（G 氏）*

*70 年代にはよくホステッドと 63 通りに行った。そこにはシアーズや Wieboldt's といったデパートや、座って食事のできるカフェやレストランがあった。ソフト・タウン・シアター（Soft Town Theater）にも行ったことを覚えている。建物のなかには商業施設があり、ダラーショップが入っていた。映画館の中ではねずみが走り回っていた。映画を見ていると、足の上をねずみが走り抜けていった。（J 氏）*

*70 年代には、母親についてイングルウッドでショッピングをしたことを覚えている。子どものころはコミュニティセンターや公園で遊ぶのが好きだった。63 通りでは、ドーナツが 5 セントで売られていた。いつも湯気が立っていて、熱くてうまかった。少し大きくなると、64 通りと Lowe 通り交差点の角にあったスケートリンクでスケートをして遊んでいた。70 年代には人々が外から買い物に来るおしゃれな場所だった。自分は、ピーナッツやキャンディを売って小遣い稼ぎをした。（C 氏）*

*祖父母が若かった頃には、食べるに困った人がいればうちにやってきて一緒にご飯を食べたり、困*

*りごとを抱えた人の相談にのったりして家の中には常に誰か来客があった。祖父母は、商売人で裕福だったので、いつも家に人が溢れていた。生活に困った人に食べ物を与え、仕事を紹介し、家には人の出入りが絶えることがなかった。イングルウッドは、村のようなコミュニティのある場所だった。誰もが顔を知っていて子どももたくさんいた。（G 氏）*

*私は、この地域に愛着がある。私の祖父がこの土地に初めて家を買った。彼は退役軍人で、起業家だった。祖父は自営業で、チープ・チャーリーという日用品と食料品を売る店を営業していた。その店は 69 通りとアミテージの角にあった。1970 年代、私は彼らとイングルウッドに暮らすようになった。そして、祖父母の家は、私にとって、安心して過ごせる場所だった。63 通りはお小遣いをもらうとすぐに買い物に出かける通りだった。子どもの頃には、親も自分も危ない等と思ったことはなかった。63 通りに行けば何でも手に入ったから、ダウンタウンに行く必要はなかった。私の祖母が昔話してくれた思い出では、映画館の池に白鳥が泳いでいたということだ。63 通りは、昔はちょっとしゃれた通りだった。（I 氏）*

*私の記憶の中では 63 通りがにぎわっており、シアーズのデパートを中心に通りに様々な店が並んでいた。アフリカ系アメリカ人が掛売りで品物を買える唯一の店だったシアーズにお使いに行ったことを記憶している。その当時は、シカゴ南部地域に暮らす人々は皆 63 通りに買い物に来ていたものだ。鉄道が走り、通りには路面電車が通り、行き交う人々で混雑していた。（E 氏）*

人々のストーリーの中から、

**結論 1：63 通りは 70 年代は安全でにぎわいのあるおしゃれな通りだった。**

63 通りは、1970 年代前半に人種の入れかわりが生じた後も、全米チェーンのファッショナブルなデパートや宝石店、映画館があり、「ちょっとしゃれたにぎやかな通り」としてイングルウッド以外の地域からも買い物にやってくる通りだったことがわかる。レストランやカフェやドーナツ店があり、人々が腰を下ろして座れる場所があった。

**結論 2：イングルウッドは、安全、安心で多様な人々が暮らすコミュニティ豊かな場所だった**

祖父母と暮らした安心できる家の思い出や、子どもだけで遊びまわっていたっことを考えると、地域の治安が良かったことがわかる。また、「祖父母の家には困ったことがあると人がやってきた」困ったことがあれば村のように助け合う人々の姿や、歯科医、お針子など、専門的職業や熟練した働き手など、幅広い階層が暮らしていた。

**結論 3：70 年代後半から 80 年代に地域の治安が悪くなった**

このようなにぎやかな、安心できる街に陰りが見え始めるのは、1970 年代後半から 80 年代ごろである。地域に変化を与えた一つの出来事は、シカゴに拠点を置く犯罪組織が現れ、若者たちを組織化

したことである。

1970 年代半ば、シカゴでは、ラリー・フーバー (Larry Hoover) が麻薬密売を生業に大規模ギャングを組織するようになって若者たちに大きな影響を及ぼした。彼は、ギャングスター・ネイションという組織をつくり、大勢の若者がこれに加わった。一方、ディビッド・バークスデイルは、The Disciple Nation という組織を立ち上げた。これらの二つの組織があるとき統合されて The Black Disciple Nation という組織になった。これらのギャングのボスたちは、のちに多重の罪で収監され獄死している。

イングルウッドにギャングに加わる若者たちが現れ、ホステッド通りを挟んで東西に縄張りを主張し、ちょうど 63 通りでにらみ合いをするようになった。このため 1990 年代には喧嘩や発砲が起こり、外に出ることが危険になった。そのころ、63 通りは歩行者天国になっており、ギャングたちはこの通りでけんかをした。

住民の証言によると次のように語られている。

*80 年代になると私は、ギャングになった。*

*当時シカゴで活動していたのはブラック・ディシプル・ネイション (Black Disciple Nation) といわれるギャンググループで、ギャングになるには、関門があり、自分がいかに組織にとって役立つ人間か、いかに賢いかを証明する必要があった。*

*ギャングに入れると誇らしい気持ちになった。また、一旦ギャングになってしまえば、常にグループで行動し、助け合わなければならなかった。他方、町の困っている人を助けたり、けんかを仲裁したりもした。BDN のチームカラーは、ブルーだった。ブルーのスカーフを巻いて、揃いの T シャツを着て 63 通りを歩いた。資金を集めて、商売を始めるという目的をグループは持っていた。*

また、ほかの住民は次のように話している。1980 年代には 63 通りが歩行者専用の通りになって車が通れなくなったと複数の人々が語っている。

*1980 年代、63 通りが歩行者天国になった。そして、車が通れなくなってしまった。駐車場は遠く、買い物をして歩いていくのが大変だったし、前のようにバスにも乗れなくなってしまった。そして、この歩行者天国にギャングたちが歩き回るようになって、すっかり治安が悪くなってしまった。63 通りがすさんできたのは 80 年代だと思う。*

ウィルソンらの研究によると、80 年代には、アフリカ系アメリカ人の居住する地域が徐々に荒廃し、若者の働く場がなくなった。これは、地域の産業転換と深くかかわるものである。70 年代ごろから工場が移転し、おもな産業がサービス業に代わってきた。スキルのないブルーカラー層の若者が働ける場所が減少し、これによって、若者の失業や、収入減や自己のアイデンティティの確立のためにギャング組織に頼るようになったと考えられる。

行き場を失った若者には、ギャングが輝かしく思えた。そろいの服や、将来何か事業をしようとい

う夢を見させてくれた。しかし、実際には、ギャングは若者たちが考えたほど素晴らしものではなかった。これらのギャング組織のリーダーは、様々な犯罪行為によって収監され、獄中死している。また、メンバーたちも犯罪行為によって服役したものも多い。

住民の話によると、ギャングが 63 通りで活動するようになり、買い物客が減り、子どもたちはひとりで買い物に行くことを親から止められるようになった。しかし、90 年代に近づくと、ギャングのリーダーたちは次々に逮捕され、裁判にかけられて、刑に服した。そのため、組織は弱体化して、ギャングすらもいなくなり、ますます通りは寂れていったのだった。購買力がなくなった地域から店舗は次々と撤退していった。代わりに、インド人や韓国人が経営する商店が出てきたが、最後には、アフリカ系アメリカ人が経営する一軒のスポーツシューズショップがあるだけになり、2000 年ごろには、すべての店がなくなって、今は荒地となっている。

### （2）都市再開発事業と地域衰退との関連性

クル・ド・サックになって、歩行者天国になったことは、車を利用する人にとってとても不便だったということである。そこでは、1970 年代にイングルウッドで行われた都市開発事業についてみてみよう。

人種の入れ替わりが始まった 1960 年代には、子どもの数が多いアフリカ系アメリカ人の数が増えたため、学校や子どもたちが安心して遊べる公園の増設が急務となった。また、移民時代から続く街並みは老朽化が始まっていた。そこで、1968 年にはデリー市長によるシカゴ市全体の再生計画が打ち出されるが、イングルウッドもこの地域に含まれていた。

1956 年当時、イングルウッドには 10 万人近くの人々が暮らしていた。1914 年には既に市街化が進んでいたため、1950 年代には建物や設備が老朽化し、住宅は庭が狭く、ビジネスディストリクトは駐車場問題が大きな課題となっていたことが 1969 年の再生計画に記されている。(Department of City Planning 1969)。デリー市長は、シカゴ市の都市再生を政策として、クリアランスによる劣悪な住宅地の撤去と公営住宅建設及び近代化が遅れている地域の再生計画を主要プロジェクトにすえるアーバン・リニューアル・プランを示した。このプロジェクトの中にイングルウッドも含まれていた。

イングルウッドでは、以下のような都市改善のプロポーザルが提示された。これは、以下に示すようなものであった。

#### 1）シカゴ・クリアランス・コミッション

69 通りに面したシカゴ・ティーチャーズ・アンド・ウィルソン・ジュニア・カレッジ以南の 7.7 エーカーについては、クリアランスを実施し、学校の敷地の拡張及び、商店や住宅を配置する。

#### 2）コミュニティ・コンサベーション委員会

イングルウッド南東部の 243 エーカーの住宅再開発及び商店街、交通状況の改善、及び公園の設置が既に実施された。さらに、プロジェクト R-47 として、中心部のイングルウッド・ショッピングセ

表 3　シカゴ・イングルウッド都市開発年表

| 年 | シカゴ（及び法の制定） | イングルウッド |
|---|---|---|
| 1937 | シカゴ住宅局設立 | 低所者向け住宅建設が始まる |
| 1939 | 連邦住宅法 | |
| 1941 | ～2000 年 Ida B. Wells 建設 | |
| 1956 | ～1968 年高層公営住宅約 19000 戸を建設 | 公営住宅供給により貧しい層が一箇所に集められるようになった<br>人口減少<br>**イングルウッド・コンサベーション・プラン（1958）** |
| 1962 | Robert Tayler Home 建設 | イングルウッドに近接する地域に公営住宅が建設<br>**アーバン・リニューアル・プラン（1962）**<br>**セントラル・イングルウッド・プロジェクト（1963）** |
| 1964 | 公民権法制定 | |
| 1968 | 公正住宅法成立 | 居住差別撤廃による住宅購入の自由化<br>**デリー市長によるイングルウッド再生計画** |
| 1970 | | 人口減少，郊外への移住<br>**イングルウッド・モール再整備計画** |
| 1975 | 住宅投資公開法 | 63 通りをクル・ド・サックとして整備 |
| 1977 | コミュニティ再投資法 | |
| 1980 | | 治安の悪化，商店街の衰退<br>アフリカ系アメリカ人を含む人口減少<br>**ルネッサンス・オブ・ネイバーフッド・コマース（ユージン・ソイヤー市長によるイングルド再整備 1988）**<br>**コマーシャル・ディストリクト・ディベロップメント（63 通りの再開通、1989）** |
| 1997 | | **デリー市長（息子）によるイングルウッド都市再生計画** |

（仁科　作成）

ンターの計画が事前調査の段階に入っている。これによって、交通の迂回計画、商業施設の改築、オフストリートパーキングの不足への対応、及び他の設備計画が立案されている。

### 3）学校委員会

マーケットストリートとグリーンストリートの交差点に、1962 年に開校する新しい学校を建設している。

イェールスクールの拡張、64 通りのマーケットストリートとノーマルに新規 2 校を開設する予定がある。

注：当時、人種の入れ替わりによって、18 歳未満の子ども人口が増えていたため、学校不足が問題となっていた。

### 4）シカゴ・パーク・ディストリクト

イェールストリートと 68 通りには 5 エーカー、ウェントワースと 71 通りの交差点に 1/3 エーカー、

ヴィンセントと 73 通りの交差点に 3 エーカーの公園の設置が計画されており、同時にオグデン公園の電燈の整備を実施する。

5）中央東地区の再開発地域

イングルウッド中央と、サウス・エクスプレスの街区の間の 63 通りについては、早期の再開発を実施する。ここには、新たな住宅と公園、小学校、地域住民のための商業施設、病院の出先機関などを配置する。

このように 1968 年の計画では、5 つの柱で再開発が行われたが、63 通りに関しては、若年人口の増加と地域の建物や道路等の老朽化、車の増加に伴うパーキングの設置等が計画された。この整備計画が実施された結果、63 通りは次の写真にみるような空間に生まれ変わった。

1960 年代後半には、63 通りと Halsted の交差点付近を中心に、商店や駐車場の整備が行われた。車を止めて歩いて買い物をする構想で整備が行われたが、利用客には頗る評判が悪かった。駐車中に、車の防犯上の安全が確保できるか心配であったし、メインストリートまでの道のりが遠かった。駐車場の量が確保できた以外、歩いて通りにでるメリットがほとんどない計画だったのだ。

1970 年代のパンフレットを見ると、117 店舗が描かれている（次頁）。前頁の写真は、1969 年に撮影された 63 通りの鳥瞰図である。左右に伸びている道路がホステッド、ちょうど写真の中央部に走る通りが 63 通り、高架鉄道がこれに平行して通っているのがわかる。このあたりが第二のダウンタウンとして最も繁栄している地域だった。この開発が完成するのは 1975 年ごろである。

*1970 年代に実施された I11、R-47 都市整備における歩行者専用のクル・ド・サックのつくりは、安全上の問題を孕んでいた。ショッピングモールの裏側に駐車するために、車が人目につかないところに置かれることになったからだ。遠くまで歩くつくりは本当に不便だった。たとえば、モールでソフトクリームを買って、車に戻ろうとすると、長い距離を歩いている間に、溶けてしまうのだった（J 氏の話より）。*

公民権運動によってアフリカ系アメリカ人の行動範囲が広域化したことや、モータリゼーションによる購買行動の変化、近隣のモダンなショッピングモールによって客を奪われたこと、道路を迂回して歩けるエリアを歩行者天国にしたことがギャングの資金調達活動の場に使われるようになり、治安が悪化したこと、また、駐車場からの距離が遠すぎて不人気となった。

この計画が失敗に終わったことは、住民たちの証言通りである。再び、ワシントン・ソーヤ市長期に再開発が行われる。

アフリカ系アメリカ人として最初の市長になったワシントン市長が在職中に死亡すると、これをユージン・ソーヤ市長が受け継いだ。

ソーヤ市長期には、イングルウッドは、更に再整備を余儀なくされるようになった（1986 年再開発 ; The Englewood Plan: Renaissance of Neighborhood Commerce）。このときまでに、シアーズとウィボルツ（Wieboldt's）の両方のデパートが閉鎖されていた。これによって客足が減っていた。60

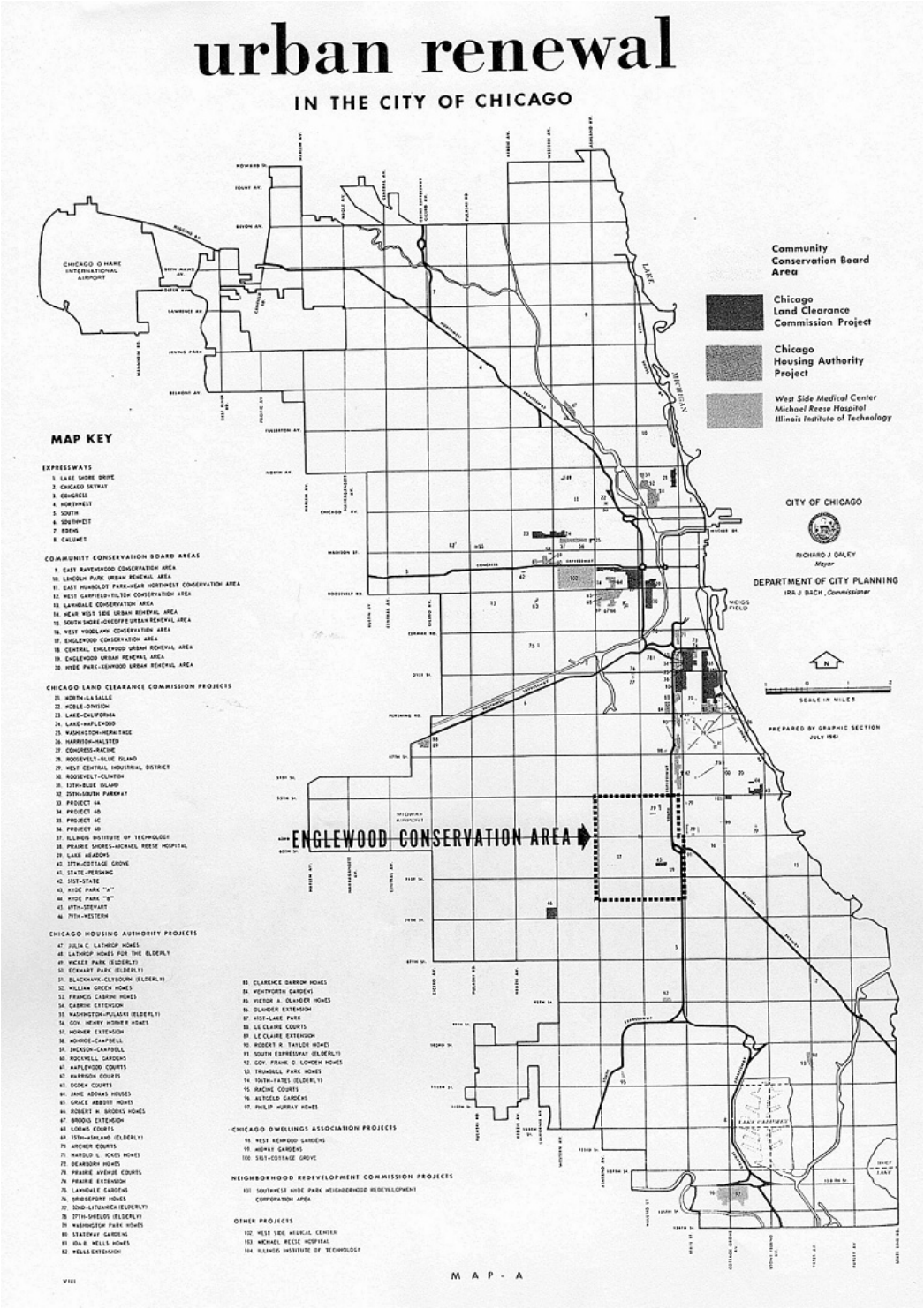


図1　デリー市長（父）の都市再生プラン（Department of City Planning 1969）

年代には、地域の人種構成に大きな変化が生じ、購買力やマーケットに変化が生じていた。また、車の普及によって、遠くのショッピングモールとの競争が始まっていた。さらには、イングルウッド・モールは、郊外にあるショッピングセンターに似せて整備されていたが、実際には全体をマネージメントする会社等は設立されず、各商店主は独立していた。

1970～80 年代にかけて、6000 戸の住宅が周辺地域で失われていった。また、人口は 20％近くも減少し、商業地域には多額の投資が行われたが、住宅地域には投資されてこなかった。当時の調査によると、地域住民の多くはもはやイングルウッドで日常的に買い物をするのは、8％に過ぎなかった。エバグリーンプラザや、フォード・シティに行く人々が約 7 割に達していた（Department of Planning City of Chicago 1988）。そして、1986 年の計画では、地域住民の購買力や現状から、ディスカウントストアが立地すること、商業施設の多様性を確保し、ミドルクラスの購買者を引付けたい、映画館やレストランなどで他の商業地と同様の魅力を確保する等が計画に盛り込まれた。これと同時に、住宅地と商業地を同時に再生することの重要性が指摘され、住宅開発が計画に盛り込まれた。そして、車を排除していた通りに再び交通を呼び戻すことが計画に盛り込まれた。商業施設に関しては、商業、飲食、サービス等の業種がバランスよく配置されること、アフリカ系アメリカ人のビジネスオーナーの参入が期待された。

また、スペシャル・サービス・エリア、セントラル・リテール・マネジメントなどを導入し全体のマネジメント・システムを構築した。さらに、広告、イベント等を促進し、商店街を盛り上げるという提案もなされた。このソーヤ市長によるイングルウッド再生計画において実現したのは、クル・ド・サックになっていた道路を再度車の通れる道路にすることだった。

図 2　1969 年の 63 通り中心付近図
写真出典：“Chicago’s Englewood Neighborhood at Junction”

*1970 年代後半頃、コリアン・マーチャント・アソシエーションとイングルウッド・ビジネスマンズ・アソシエーションは一緒に働いていたが、ショッピング街の建替えに当たって、アフリカ系アメリカ人の商店主の入居を優先したために、韓国系の商店主が排除された。地域の活性化のためには、すべての商店主が整備後に復帰することが必要だったが、韓国人の商店主たちは戻ってこなかった。再開発後、モールの店舗の賃料が高騰し、小さな店舗を経営していたアフリカ系アメリカ人店主たちには到底支払えないような金額になった（J 氏の話より）。*

再開発によるジェントリフィケーションが地域を衰退させたのである。

### （3）公営住宅の解体がイングルウッドに及ぼした影響

1937 年にシカゴ市住宅局が設置され、1950 年代から 60 年代にかけてシカゴでは約 19,000 戸の高層の公営住宅が建設された。1962 年、イングルウッドと最も近いところに建設されたのは、ブラックベルトといわれるかつてのアフリカ系アメリカ人の居住地域をクリアランスした後に建設されたロバート・テイラー・ホームスだった。政府の実施した公共住宅政策は、大都市中心部のアフリカ系アメリカ人地域を中心に公営住宅を配置していった。

1960 年代には、人種差別問題は危機的状況に達しており、公民権運動の進展を背景に、シカゴ市住宅局は公営住宅を建設することによってよりよい住環境と人種混合のエリアにするようにプロジェクトを進めた。しかし、このことは、人々が期待していたのとは異なる結果を招いた。公営住宅は、不法占拠や暴力、薬物の売買などの違法行為がはびこりパブリック・スラムと揶揄され、犯罪の温床となってしまったのである。

ロバート・テイラー・ホームスは、シカゴの公営住宅では大きな規模のものであり、16 階建ての高層住宅が 28 棟も連なっていた。そして住宅は、シカゴ住宅局の最初のアフリカ系アメリカ人局長にちなんでつけられたものであった。犯罪の状況についてウィルソンは次のように述べている。

（以下引用）

*シカゴにおいて、1970 年代には黒人が被害者となった殺人事件の 98％は黒人によって起こされたものであった。ヒスパニック系の殺人事件は 75％がヒスパニックによるもの、白人の殺人事件の 51.5％が白人によって起こされたものであった。1980 年代には、黒人による黒人の殺人事件は 98％、ヒスパニックによるヒスパニックの殺人事件は 81％、白人による白人の殺人事件は 52％だった。これらの事件に関して重要な点は、これらの殺人事件は、地域の経済的なステータスに大きく影響を受けているということである。シカゴの半数以上の犯罪が、24 区内（当時の警察の区分）で発生し、これらの地域は、貧しい黒人とヒスパニック系の地域であった。シカゴで、最も犯罪件数が高いのは、南部地区にあるウェントワース・アベニュー（Wentworth Ave.）区域である。この地区は、シカゴ市全体の人口の 3.4％が居住し、広さでは、4 マイル（6.4 キロメートル）四方であるが、1983 年の殺人事件の 11％に当たる 81 件、暴力事件の 13％に当たる 1691 件がこの狭い地域で発生した。もっと細かく見るとこの地域には、ロバート・テイラー・ホームス（Robert Taylor Homes）という公営住*

*宅があり、これは、シカゴで最大級の公営住宅プロジェクトである。28 棟の 16 階建の建物によって構成され、92 エーカー（0.37 平方キロメートル）である。この団地には、1980 年に公式には約 20,000 人が暮らしているといわれていたが、このうち 5,000〜7,000 人が正式には入居していない人々であるともいわれていた。所得の中央値は、5,470 ドル、93％の子どものいる世帯は、ひとり親世帯であった。83％が児童手当（Aid to Family with children）を受けていた。失業率は 47％に上る。市の殺人事件の 11％、レイプ事件の 9％、暴力事件の 10％がここで起こった。カブリニ・グリーン（Cabrini-Green、他の公営住宅地区）も同様の状況を示した。*

（引用終わり）

ロバート・テイラー・ホームスは、この当時台頭し始めたギャングたちの根城になった。The Mickey Cobras (MC's) と Gangster Disciples (GD's) gangs という二つの組織がこの住宅地を独裁するようになった。これらのギャングの影響はイングルウッドにも及び、若者たちはこのグループに取り込まれて犯罪に手を染め、異なるギャンググループとの対立を深めていった。犯罪率については、ウィルソンの解説の通りである。

1980〜90 年代初当のシカゴトリビューンには、シカゴの公営住宅における犯罪の多さが記事として掲載されている。

（以下 シカゴトリビューンより）

*シカゴ市住宅局は、一日にロバート・テイラー・ホームスで取引されるドラッグは約 4 万 5 千ドルに上るといっている。かつての住民の証言によると、ドラッグ・ディーラーたちが団地をコントロールしようとして争い、ある週末には個別の銃声が 300 発も聞こえたという。同じ週末に 28 人の死者が発生した。そして、この事件のうち 28 件全部がギャングが関係している犯罪である。*

*ロバート・テイラー・ホームでの犯罪は、1970 年代を通じて上昇し続けた。ほとんどの公営住宅での犯罪は、ドラッグかギャングが関係していた。1976 年 10 月、22 歳のデニス・ドジヤーが 15 階のアパートの窓から投げ落とされた。しかし、彼女は幸いなことに命をとりとめた。*

*1983 年 6 月 25 日、ビニエット・ターゲという幼児が、祖母が電話に出るために目を離した数分の間にさらわれた。おおむね 50 人の人々が廊下にいたにもかかわらず、警察は誰からも証拠となるような有用な証言を得ることができず、事件は迷宮入りしている。その後、幼児の姿を目撃したものは誰もいない。*

*1991 年 8 月 15 日、深夜少し前にシカゴ市警察のジミー・ヘインスは、ロバート・テイラー・ホームスからライフル銃で狙撃され、マーシー病院で 2 日後に亡くなった。3 人の容疑者が逮捕された。*

*1993 年 2 月、ギャングのミーティングが行われている際に警察官の通行を許した公営住宅の管理人は、その後撲殺された。*

ロバート・テイラー・ホームスは、カブリニ・グリーンと同様 90％以上は、アフリカ系アメリカ

人で占められていた。そして、ドラッグと犯罪と暴力によって支配されていた。ほとんどの住民は、失業しており、公的な経済支援を必要としていた。慢性的な政府の予算の問題によって、公営住宅の修繕やソーシャルサービスは滞っていた。公営住宅の居住環境は益々悪化していった。これが 1990 年代後半まで続く。

公営住宅は、1950 年代にデリー市長（父）が整備したものであったが、1990 年代には、荒廃が進み、その息子が市長になってミクストディベロップメントとして再生した。日本の公営住宅再生では、既存の住民には 100％建替え後の住宅が準備されるが、シカゴの公営住宅は、不法占拠者が多く、すべての住民が再生された住宅に再入居できたわけではなかった。むしろ、公営住宅は著しく戸数を減らし、分譲住宅が供給されて、新たな住民は、ミドルクラスが半分以上を占めるようになった。このため、安い家賃の賃貸住宅を求めて、イングルウッドのような地域に人々は転居して行った。こうして、地理的に近い他の地域のジェントリフケーションは、開発が遅れて家賃の安い地域により一層低所得の人々を引き付けることになったのである。

### （4）まとめ　都市の荒廃を引き起こした複合的な要因

これまでみてきたように、イングルウッドの荒廃は、人種の入れ替わりという単純な問題がもたらしたものではなかった。人種の入れ替わりという点では、1970 年代初頭にほぼ 96％が、アフリカ系アメリカ人となっており、この時期にはまだ活気のある商店街が残っていた。地区衰退の原因について最後にまとめておく。

都市機能という観点からは、デパートやレストラン、ドーナツ屋のような地域で親しまれ、集客力のある施設が撤退していったことにより、地域が集客機能を失ったことが大きな要因である。さらにこれらの店舗の撤退要因は、地域の購売力の低下であった。これによって、地域全体がファッション性を失い、外部からの買い物客が異なる地域に行くようになった。また、街中には、映画館や宝石店やカフェやレストラン、バーなど、人々が交流できる空間が残っていた。人種の入れ替わったあとも、カフェや遊び場や映画館のある賑やかな商店街が人々の記憶に残っている。しかし、この頃の映画館は、ねずみが走り回る映画館になっており、華々しい商業地域からの転落が垣間見られる。しかしこの時期はまだ、子どもたちは表を走り回り、子どもが買い物できるお菓子屋が町にあり、様々な階層の人々が混合しているバーやカフェやデパートが、居場所として存在していた。

交通面では、1970 年代後半に歩行者天国になったために、公共交通機関が入れなくなった。人通りの多い商業空間は、かつては路面電車、のちにはバスによって人を運んできていた。また、駐車場の拡張を試みたことがこの再開発の重要な点であったが、郊外のショッピングモールと比べると買い物をする場所から遠いところに駐車することになってしまい、利便性が失われた。

60 年代から 70 年代の大きな変化はホワイト・フライトによって、地域の人種がポーランド系の移民からアフリカ系アメリカ人へと入れ替わったことである。当時多くの都市において都市の中心部での人種の入れ代わりが生じた。しかし、この頃の地域の社会階層はまだ多様であった。ヒアリングの中でも、70 年代の半ばごろまでは、「お針子や仕立屋、歯医者などのプロフェッショナルな人々がい

た」、また、祖父母の家に困ったときに助けを求めて人がやってきたという話から、多様な階層が暮らす町であったことがわかる。困った人は余裕のある人々に助けてもらうことができる社会的関係性が残っていた。

ところがこの時期に起こった二つの大きな都市の変化が地域に影響を与える。

ひとつは都市計画の失敗である。63 通りの駐車場不足を解消するために、車で通り抜けることができるショッピングストリートをクル・ド・サックに作り変えて、駐車場をショッピングモールの外周に配置した。これによって、商店街の交通の流れが途絶え、駐車場からの距離が遠くなり、不便になってしまった。シカゴ市でのギャング活動の活発化により、治安が悪くなってくると、イングルウッドにもギャングたちが現れ、整備された歩行者天国を闊歩するようになり、商店街の裏側に駐車場を配置したことによって、安全性に問題が出始めた。

もうひとつは、近隣で行われた新規開発である。近隣の近代的な商業施設の新規開発も 63 通りに打撃を与えた。モータリゼーションの進展とこれに対応した新たなショッピングモールのオープンによってイングルウッドは、最もファッショナブルな町から転落していくのが 70 年代後半あたりである。公民権運動により、自分たちの町にとどまっていたアフリカ系アメリカ人は自由にどこにでも出かけて買い物をするという生活ができるようになっていった。

80 年代、ソーヤー市長は、任期中になくなったワシントン市長のあとを引き継ぎ、さらなる再開発を行って、歩行者天国を廃止するが、失業率が高い地域の状況に鑑み、アフリカ系アメリカ人の小売り業を優先的に入れようとするが、これが、そのころすでに店を持っていた韓国人の商店主たちの撤退を招いたと同時に、高騰した家賃はどちらの人々にも高すぎるものとなった。再開発がジェントリフィケーションを生み出し、いわゆる近所のおじさんおばさんの店は、再入居できなくなった。

同時に、近隣地域において、新たなショッピングモールが次々とオープンし、また、70 年代初頭には、バス等公共交通機関を利用してイングルウッドへ来る人が多かったが、70 年代半ばごろには車に変わった。これによって、イングルウッドは駐車場が不足し、モールの外に駐車場を確保することを選択した。

さらに、その後 1980 年代後半には、クル・ド・サックを解消した。ソーヤ市長の再生プランでは、商業地域へのアフリカ系オーナーの参入、住宅の整備、コミュニティ・ディベロップメントなどが盛り込まれていたが、その実現を見ることはなく、新たに市長となったデリー氏（息子）は商業地域の開発のみを中心に進めていった。住宅地の整備に目を向けない、商業地域に特化した整備であった。このため、人口が増加せず、残った人々は購買力が低く、商業自体も衰退し、イングルウッドは買い物のできる店も消えてゆき、空き地と空き家ばかりとなっていった。70 年代の公民権運動によって、アフリカ系アメリカ人は、権利を回復していった。公正住宅法は住む場所や住宅を購入する権利を保障した。そこで、80 年代に治安が悪くなると、余裕のある人々は、イングルウッドを去っていった。おりしも空き家が増えたところで、近隣の公営住宅再生事業が実施され、安い家賃の住宅を求めて人々はイングルウッドにやってきた。80 年代の 10 年間は坂を転がり落ちるように人口は更に減少し、残っていた商店もなくなり、地域は野原に変わっていった。人々は、仕事を探すのにも、お茶を飲む場所も、レストランで食事をするためにも、買い物をするにも地域の外に行かなければならくなった。

このように、イングルウッドの衰退は、複合的要因によって生じてきた。特に、63 通りでは、20 世紀の間に 3 度も大きな都市再開発を実施したが、どれも失敗に終わった。産業構造の変化とグローバリゼーションにより、工場が移転し、人々が仕事を失っている。イングルウッドは、人種が入れ替わって衰退したのではなく、都市開発の失敗と治安の悪化とジェントリフィケーションが起因となって、80 年代に衰退の一途をたどった。つまり、多様な社会階層が住めなくなるソーシャル・エクスクルージョンが、地域の衰退要因として重大である。

今日、21 世紀には、イングルウッドにおいて 4 度目の再開発事業が行われる。長い間空き地になっていた 63 通りに、新たな再開発事業が実施される。今度は、ホールフーズストアを含む典型的なモール開発である。これは、かつてのシアーズのように、起爆剤となっていくだろうか。また、1990 年代にシカゴで起こった公営住宅の再生とジェントリフィケーションについては、さらなる研究の課題である。本稿では、地域の中で始まっている草の根のまちづくりについては言及できなかった。これについても、引き続き研究を進めていきたい。

なお、本研究は一般財団法人第一生命財団 都市とくらしの分野（2014～15）より助成を受けている。